

連載「プロマネの現場から」

第 209 回 山片蟠桃の今日的意義 ～現場知と思想の架橋～

蒼海憲治（大手 SI 企業・グループ会社・事業部長）

1. 朝の黙礼と山片蟠桃との邂逅

私は毎朝、出勤時にある小さな寺の前を通ります。私はその門前で毎朝黙礼するのを習慣としています。特別な宗教的信仰があるわけではありません。ただ、その寺には、私にとってある種の「知的刺激」として敬意を表したい人物が眠っています。

その人物の名は、山片蟠桃（やまがた ばんとう）。18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて活躍した町人学者であり、商人としては経営難に陥った升屋を再建し、仙台藩の財政再建にも尽力した実務家でした。一方で、彼は懷徳堂で朱子学を学び、天文学や蘭学にも通じ、晩年には失明を乗り越えて主著『夢の代』（ゆめのしろ）を完成させました。この書では、地動説の支持、無神論、記紀批判、合理主義的経済観など、当時としては驚くほど先進的な思想を展開しています。

蟠桃は、当時の主流思想であった朱子学的世界観を批判し、人間の理性と行動によって社会は変えられるという先進的な思想を持っていました。合理主義・経験主義に根ざしたその姿勢は、今を生きる我々、特に SI 業界で実務に携わる者にとって非常に共鳴する部分があると考えています。

私自身、SI ベンダー企業の技術部門で、これまで、国内外の大規模プロジェクト、システムトラブル対応、IT 企画支援など、現場で実務を積み重ねてきました。その過程で常に意識してきたのは、「現場の知」をいかにして思想へ昇華させるか、という問いでした。その意味で、蟠桃という存在は、私にとって大いなる知的ロールモデルの一人でもあります。

2. 商人としてのリアリズム、思想家としての構想力

山片蟠桃の本職は商人、つまり経済人です。彼は升屋という大阪を代表する商家で番頭として働き、事業を支える実務の中核を担っていました。升屋は、江戸幕府の蔵屋敷を通じて米の取引を手がけ、当時の大坂経済の要を成す存在でした。蟠桃はそこで財務管理や信用取引などを実践的に学び、そこから得た経験を土台として思索を深めていきました。

この姿勢は、まさに「実務知の思想化」です。私たちが日々向き合っているプロジェクト管理、顧客対応、チームビルディングといった IT 現場の課題も、そこに本質を見出し、構造化して考えるならば、単なる「ノウハウ」ではなく、「思想」へと昇華させるものです。

たとえば、ある大規模な基幹系システムの刷新プロジェクトで、私は顧客の IT 部門と二人三脚で構想から導入、定着支援までを担いました。現場の多様な意見を調整し、複数のベンダーと交渉しながら全体アーキテクチャを設計するプロセスは、まさに多面的なリアリズムと構想力の結合が求められます。

蟠桃さんが、経済活動の実態を冷静に観察しながら、それを超える抽象的な理論や思想にまで昇華したように、我々も現場の「雑多な現象」にこそ、未来のヒントが潜んでいることを忘れてはなりません。

3. 「神も仏もない」合理主義者のまなざし

山片蟠桃の時代、日本では「天命思想」や「因果応報」が当然視されていました。儒教や仏教、神道といった宗教観が社会の規範を支えていたのです。

しかし彼は、これに真っ向から反論します。「天災や運命は人間の努力によって乗り越えられる」と考え、人間の理性と判断の力を高く評価しました。

『夢の代』における蟠桃の主張の中でも特に注目されるのは、彼が宗教的因果論を否定し、「世の中は神仏の意志ではなく、人間の行為によって動く」という姿勢を貫いたことです。蟠桃は「天命」や「因果応報」を信じず、歴史や経済の動向を実証的・構造的に分析しました。これは、まさに人間中心主義とも言える考え方です。

現代の IT 業界でも、「根拠なき習慣」や「前例主義」が意思決定を曇らせる場面は少なくありません。たとえば、システム更改の判断が「既存ベンダーがそう言っているから」「昔からこの方式でやっているから」といった理由でなされるケースも見受けられます。しかし、こうした慣習に疑問を投げかけ、論理とデータに基づいて意思決定する姿勢こそが、蟠桃さんの合理主義の現代的継承であると思います。

蟠桃さんが批判したのは「宿命に甘んじる心」でした。私たち IT 技術者も、仕様書の限界や旧態依然の仕組みに抗いながら、新しい現実を創り出すことを目指さなければいけないのではないのでしょうか。

4. 周縁からの視点と中間管理職の知性

山片蟠桃のもう一つの特徴は、社会の中枢からではなく「周縁」から物事を見つめていたことです。彼は武士や公家といった支配階級ではなく、一介の商人、しかも番頭という中間管理層に過ぎませんでした。しかし、その立場から見える世界こそが、現実の社会をより正確に捉えるレンズだったのです。

私は、これを「中間管理職の知性」と呼びたいと思います。中間の立場にいるからこそ、現場の声も経営の論理も理解できる。矛盾する利害を調整し、物事のバランスを見極めながら未来の方向性を構想する—このような知性は、蟠桃さんの時代にも、そして現代にも極めて重要です。

蟠桃さんは、上から見下ろすのでもなく、下から愚痴るのでもなく、「横から世界を斜めに見つめた」こと。それは、組織の中間にいる我々が持つべき視点そのものだと感じています。

5. 「サードプレイス」としての思想空間

私は以前、「サードプレイスの効用」というテーマでメルマガを執筆しました。職場でも家庭でもない「第三の場所」において、私たちは自らを見つめ直し、新しい関係や視点に出会うことができます。

蟠桃さんにとって、夜な夜な執筆した『夢の代』の時間と空間こそが、まさにサードプレイスだったのではないのでしょうか。昼間は商人としての責務を果たし、夜は思索者としての自由を生きる。この二重生活は、現代で言えば、副業や勉強会、研究会といった営みに通じます。

私も、社内外の勉強会や情報システム学会での活動を通じて、業務の枠を超えた思索の機会を得ています。そこでは、技術的関心だけでなく、人間・社会・組織に関する深い問いを共有する仲間と出会うことができる。蟠桃のように、業務の外に「もう一つの頭脳空間」を持つことは、実務者にとって不可欠な知的サバイバル戦略ではないのでしょうか。

おわりに ～「知の自営人」としての蟠桃を現代に甦らせる～

山片蟠桃は、特権的知識人ではなく、制度的権威にも依らない、いわば「知の自営人」でした。自らの現場経験を通じて構想し、時代の因習に抗いながら、自らの思想を紡ぎ出した。彼のような存在は、今日の SI 業界においても必要とされています。

「実務に流されず、思想を持て」—これは、新人の頃、当時の上司にいわれ、それ以降、大切にしている言葉です。プロジェクトの納期や技術の進化に日々追われながらも、その背後にある社会や歴史、思想に目を向けてほしい。なぜ我々はこの技術を選ぶのか、なぜこの構造が求められているのか。そうした問いに向き合うことが、実務を越えて「構想力ある技術者」への道を拓くはずです。

蟠桃さんの墓前での黙礼は、私にとって「日々の実務を思想へと昇華させることを忘れるな」という、静かな自戒の時間でもあります。現代において蟠桃さんを読み直すこと、それは我々自身のあり方を問い直すことに他なりません。